

オンライン英会話を取り入れた発信型指導が 英語スピーキング力と異文化理解に及ぼす効果

飯野, 厚 / IINO, Atsushi

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

89

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

161

(終了ページ / End Page)

182

(発行年 / Year)

2022-03-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025200>

オンライン英会話を取り入れた 発信型指導が英語スピーキング力と 異文化理解に及ぼす効果

飯 野 厚

要旨

本研究は大学英語教育における民間オンライン英会話サイトの活用の事例を示す実践報告である。筆者は演習（ゼミ）において、国際社会問題にもとづくディスカッション、プレゼンテーション、タスクといった、英語を用いた発信型の指導の一貫として、授業外のオンライン英会話を長期的に取り入れてきた。とりわけ、学習者が海外在住の英語話者（非英語母語話者）に毎週の話題について発問をする活動に焦点を当て、1年間にわたる導入がスピーキング力、異文化受容力にどのような影響を及ぼしたかを探った。その結果、スピーキングテストでは事前・事後間でプラスの効果、国際共通語としての英語への態度を測る質問と個別インタビューデータから、多様な英語を許容する寛容な態度への変容が観察された。オンライン英会話による英語運用能力向上の実感や英語を通して多様な英語のあり方、物事の考え方に触れる豊かな異文化理解の機会が得られていることが要因として示された。

1. はじめに

新型コロナウイルス感染防止対策が常態化した2020年度、非接触型であるオンライン英会話の市場は大幅に増加したという（矢野総研, 2021）。オンライン英会話は従来型の英会話学校が減少する中、一部の中学校や高校、大学の教育体系の中に取り入れられたり、2020年度から正式に全国実施された小学校英語教育の導入などもあいまって益々需要が膨らむと予測されている。

オンライン英会話の大きな利点として、リアルタイムで日本人以外の人と英語を使ってコミュニケーションを実際に行う機会が得られること、また、その中で、対話相手の国や生活情報などが得られる異文化理解が含まれる点が挙げられる。更に、コミュニケーションの過程で、ネイティブスピーカー以外のさまざまな人が話す英語に接する機会が増えることから国際共通語としての英語（English as a Lingua Franca）を活用する体験を積めることもグローバルな時代の英語学習の形態として期待できる。

このような状況下で筆者が散見するのは、学校単位でオンライン英会話を導入はしているが内容的には英会話サイト側に丸投げで、通常授業の指導内容とつながりのない形で導入されている事例が少なくないことである。学校の授業の一環として、オンラインとはいえ英語で1対1で人と話すという、多くの日本人学習者が体験したことのないコミュニケーション形態を仕向けるのであれば、何らかの補助となる教育上の連携が必要と思われる。

2. オンライン英会話の授業利用に関する先行研究

Zwaard and Bannink (2018) は、ネイティブスピーカーとノンネイティブスピーカーのオンラインチャットにおいて、ネイティブスピーカー側よりもノンネイティブ側（すなわち英語学習者）が話題源を持つことによっ

て、意味交渉（Negotiation of Meaning）の機会が増すと報告している。英会話の効果を探る上で話題源を英会話の指導者側が提供するのか、学習者の側が提供するのかは、対話の促進にとって重要な要素であることを物語っている。そこで、先行研究を、話題源がオンライン英会話側が提供したものと、大学等の通常の英語カリキュラムの中にオンライン英会話を取り込んで成果を検証したものに分けて検討する。

3.1 オンライン英会話主導のコンテンツで実施

江口（2019）ではオンライン英会話の経験を積むことによってスピーキング能力が伸びるかを、経験時間（受講回数）とVersantスピーキングテスト（Pearson）との相関で検証した結果、有意差のある相関関係は見られなかったという。一方、遠山・森・新谷（2017）はスピーキング不安の解消という心理的要因の改善に効果があると報告している。三田（2014）もスカイプ英会話を、大学生に2か月受講させた結果（週1～3回）、学習者のコミュニケーションへの自信が向上したとしている。小林（2021）も大学生を対象に1か月間に8回のオンライン英会話を経験させた結果、スピーキング不安の軽減、自己肯定感の高まり、英語学習への肯定的影響がみられたという。これらの先行研究の特徴は、一定期間オンライン英会話を受講させると、心理的な効果、とりわけスピーキング不安の軽減が見られるとするもの研究が多い。一方、自信や不安以外の異文化的な要素の態度変容などはあまり探られていない。

3.2 授業における話題と関連性の高いオンライン英会話の活用

飯野・藤井・籾田・佐藤・中村・岡（2020）は、大学生に対して授業内で扱った社会問題に関するロールプレイ・タスクをオンライン英会話で再度実施するというタスクサイクルを取り入れた結果、スピーキングの流暢さ、複雑さに効果があったとしている。瀧野（2019）は、大学の授業の一部としてオンライン英会話の利用をタスクサイクルに組み入れる実践を報

告している。服部（2021）は、大学の講義内容にもとづいて、オンライン英会話で医療分野における定型表現を実際に使う機会を確保した結果、学習者心理に肯定的な効果があることを示した。これらの先行研究の特徴は、通常の授業内容と結びつけて、オンライン英会話にどのような役割を担わせるのかを検討した上での実践報告として価値がある。一方、客観的にスピーキング力への効果を探るような能力の変化を探る研究は希少である。

4. 本研究の目的

通常授業の話題にもとづいたアクティブラーニングの活動サイクルにオンライン英会話を組み込みこんだ効果を探る。とりわけ英語スピーキング力と異文化理解にどのような効果を示すかを探る。

5. オンライン英会話を取り入れた発信型指導

実践の背景

対象となる学習者は筆者が担当する演習（ゼミ）の学生である。演習のテーマは、英語運用能力の向上と異文化コミュニケーションの実践と研究である。2年次から4年次まで持ち上がりで同じ学習者を指導し、4年次に英語で卒業論文を執筆することがゴールである。読み書き能力の育成はその前提であるが、その土台となるのが音声によるコミュニケーション能力である。2～3年次の2年間でどこまで話せるようになるかが重要となる。話すためには聴く必要があり、発信型の英語学習を行うとそれに先立つリスニング力が向上するのは自明である。従って、課題となるのは、学習者が対人コミュニケーションの場面で英語を話す機会をいかに確保するかである。その解決策としてオンライン英会話は学習環境として理想的である。筆者は、2011年の演習開講以来10年に渡り、オンライン英会話を取り

入れた取り組みを行ってきた(付録1参照)。本論では実践を振り返る意味も含め、その効果を検証することを狙いとする。

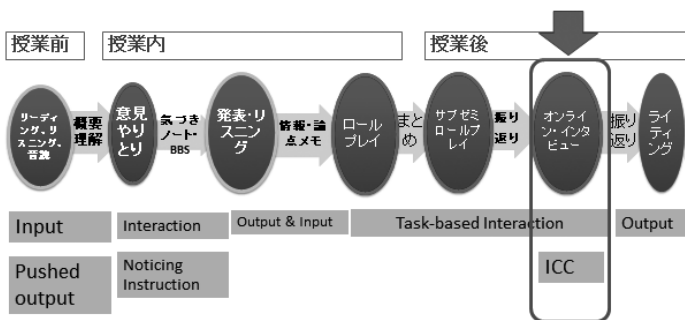
活動構成

各セメスターの演習授業内で10週間、以下のようなサイクルで英語の対話力強化と異文化間コミュニケーションの機会を提供した(図1, 付録2)。本研究では、図1における「授業後」の中での「オンラインインタビュー」に焦点を当てる。詳細は活動の説明の⑧と⑨の部分に記す。

(1) 授業前

授業内でプレゼンテーションやディスカッションから成るアクティブな学習を進めるために、予習として社会問題・時事問題を提供する教科書の英文と設問への回答およびディクテーションは各自で行う。授業開始時に読解の痕跡として述語動詞に下線を引いたテキストと設問への解答があるかを個別に確認する。更に、本文の音声をパラレル音読(モデル音声と同じペースで声に出す)を行い、録音した音声ファイルをLMS(学習マネジメントシステム)に提出する。

図1 オンライン英会話を取り入れた発信型のタスクサイクル



(2) 授業中（付録3，①～⑥参照）

①予習実施チェック

授業の最初に、授業準備として行ってきた課題の実施状況を学習管理担当の学生とともにハンコを押して確認する。その後、以下のような構成で対話、プレゼンテーション、ロールプレイによるディスカッションを行う。

②トピックに関する対話

CALL教室のランダムペア機能を使って、ワークシートに提示されている質問とそれらに対する自分の考えを即興で話す活動を行う（付録3-②）。質問は当日話題となる重めの話題（例えば、動物実験の是非）への導入的な内容である。

③対話の中で言いたかったが言えなかった語句・表現のメモ

対話中または直後に、英語で言えなかった表現を日本語でワークシートに書き、対話後にそれらに相当する英語を調べてワークシートに記入する。その中から1つ選んで、学習支援システムの授業内掲示板に投稿し、授業内メンバーと共有する。メンバーはそれを見て、他者の表現で参考になった英語の語句を書き取り、表現のレパートリーを増やす（付録3-③）。

④プレゼンテーションの実施・聴き取り（メモ＋発表者評価＋質疑応答）

毎週指定されたテーマごとに6名のグループがプレゼンテーションを英語で行う。学期の最初にグループと担当章（トピック）を決定し、スライドを一週間前までに完成させ、担当教員の添削指導を経て発表練習を行い、当日の発表に備える。内容は、英文テキストの事実と論点の整理に加えて、独自の資料や論点、事例を提供することが求められる。発表スライドは、Google Slidesを活用し、グループのメンバーと担当教員が共有できる設定とする。聞き手の学習者は、ワークシートにメモを取りながら、各発表者の評価を記入する（付録3,④）。その後質問を用意する（付録3,⑤）。プレ

ゼンテーショングループは3名で構成するサブゼミグループ2組を合わせた6名で、2年生と3年生の混成であり、経験のある上級生がリーダーシップをとることが求められる。

⑤質疑応答

プレゼンテーションの後、挙手により質問を自主的に行う時間を設ける。発問した者には認定スタンプを与え、活発なやり取りを促進する。

⑥ロールプレイトask

プレゼンテーション後、学習者を3人1組のグループに分け、グループ内で賛成、反対、意思決定者に分かれてロールプレイトaskを実施する（例えば、付録3-⑥：化粧品会社の社長 [意思決定者]，同社営業担当 [動物実験に反対]，化粧品開発担当 [動物実験に賛成]）。準備時間は10分程度までとし、ワークシートに発言する内容の要点やキーワードのメモを記入し、それにもとづいて話すように指導する。内容に関しては、あらかじめ読んでテキストの内容、プレゼンテーションの内容を吸収した論点に、自分なりの例を加えるよう指導する。意思決定者は、賛否両論を聞き意見の質の高さと説得力にもとづいて立場を決めるように指導する。15分程度の対話時間を経てクラス全体で各グループの意思決定者が下した結論とその根拠を共有する。

(3) 授業後

⑦サブゼミグループ3人でロールプレイトaskを再度実施

サブゼミグループの3名は3年生と2年生の混成で、毎週グループごとの空き時間にZoomを利用したオンライン会議形式で、授業内で行ったロールプレイをもう一度行う。25分を目安に学生主体で英語を使う時間を設け、対話をZoomで録画しGoogle Driveの指定フォルダに提出する。

⑧, ⑨オンライン英会話を利用してトピック関連のインタビュー

演習履修生は、オンライン英会話サイトDMMと10カ月間毎日1回(25分)英会話ができる契約を結ぶ。各自で自由に活用することに加え、異文化理解を促す授業外の学習活動として、授業内のテーマに関して週に1度、学習者が英会話講師にインタビューを行うことを義務付けた。講師は、在外の英語使用者(非英語母語話者)である。学習者は事前に質問を用意し(付録3,⑧)話題について質問と討論を行う。また、学習者はオンラインインタビュー後に対話パートナーから言語的、内容的フィードバックを受け、ワークシートに記入する(付録3, ⑨)。

⑩トピックに関する意思決定者としての意見英作文(教科書文中語句使用, セルフチェック)

一連の活動サイクルの仕上げとして、テーマに関する学習者の主体的な意見を作文して提出する。

⑪教師の添削を受けて修正しBBSに匿名投稿

英作文は毎週提出し、担当教師が添削を行い随時返却する。返却された添削への対応を含めて、授業内電子掲示板システム(BBS)に清書を投稿し、作品を共有する。投稿した作文は匿名で掲示される。

6. 効果検証の方法

対象者

筆者が担当する演習(ゼミ)の履修生26名で、大学3年生14名(女子7, 男子7), 2年生12名(女子5, 男子7)で構成された。英語力の指標として、TOEICの平均点は590点(標準偏差82点)でありCEF-R基準によるB1レベルに相当した。志願してゼミに入った学生のため、英語学習への意欲

は高めであった。なお、効果の測定を実施した年度は、民間企業であるDMM英会話と筆者のゼミで特別な契約を結び、10カ月間毎日25分間の会話レッスンを受講できる条件を整えた。費用については各学生とその保証人に案内を出し、承諾の上徴収した。なお、かなり格安でのサービス提供につき、非英語母語話者の講師という限定付きであった。また、数あるオンライン英会話の中でもDMM社は、指導内容の中に「スピーキングテスト」があることから利用に至った。

尚、対象者のすべてに書面と口頭により、研究情報の使用目的、使用方法、守秘義務の徹底を説明し、書面でデータとしての利用承諾を得た。

測定方法

英語スピーキング力

オンライン英会話DMM社の「スピーキングテスト」を5月と1月にそれぞれ4回ずつ受験した結果を採用した。DMMのスピーキングテストは、およそ20分間で、BasicとAdvancedの2レベルにある複数の問題から選択ができる（発問内容は非公開）。Basicレベルから2回、Advancedレベルから2回を指定したテスト番号で各自、予約して受験するよう指示した。テストの構成は以下のとおりである。

- (1) 音読（語、文 [1分間の黙読後]）、
- (2) 音読した文章（ニュース記事など）についてQ&A 3問、
- (3) 絵描写（準備30秒後1分程度）、
- (4) [Basic] ショートスピーチ（準備1分後2分間、話題は明日の予定、家族の紹介、趣味など）；[Advanced] 2つのグラフ（経年変化など）を見て比較を述べる、何が言えるかを語る、
- (5) [Basic] スピーチに関する質疑応答；[Advanced] グラフが示す問題の解決策について質疑応答

スピーキングテストの詳細な評価基準は不明であるが、上記（1）～（4）が各4点満点、（5）が10点満点で、30点を総得点とするスコア評定

にもとづいて、7段階の評価スケール（2「初心者」～8「上級者」）でレベル評定が示されるしくみである。これらの詳細は、指導者がDMM英会話の学習履歴画面から閲覧できる。

異文化理解

「国際語としての英語」認知評価スケール（Nakamura, Lee, & Lee, 2018）を採用し、その質問紙を4月と1月に実施した。因子分析を経て精査された14項目の内容に対して5ポイントスケールで回答するものであった（1 ほとんどそう思わない 2 あまりそう思わない, 3 どちらともいえない, 4 ある程度そう思う, 5 強くそう思う）。

この評価質問紙を採用した理由は、オンライン上の国際的なコミュニケーションを前提として、国際共通語（English as an international language: EIL¹⁾）としての英語への態度を観察するために開発されており、整理された質問構成となっているためである。4つの因子は以下のとおりである。

EIL 1: 現代の英語の位置付けの理解

EIL 2: 多様な英語に対する態度

EIL 3: 多言語/多文化間コミュニケーション のための方略

EIL 4: 英語話者のアイデンティティのとらえ方

オンライン英会話に関する半構造化面接

春学期末の7月と秋学期末の1月に実施した個別の面接の録音音声と筆者のメモから、スピーキングや異文化理解に関して自由に述べられた言説を拾い、考え方やとらえ方に変化が見られたかを探った。

1) ELF (English as a Lingua Franca) という用語 (Jenkins, 2007) もあるが、同スケールの開発者の用語をそのまま利用した

7. 結果

スピーキングテスト

2020年度5月（初期）と1月（終期）の各テストにおける全対象者の粗点平均値，合計平均値，および7段階レベル評定中の平均値を表1，表2に示す。6種類のテスト結果の総合平均値は5月がM=5.3，1月がM=5.6であり，5%水準で統計的な有意差が認められた ($t(25)=2.08, p=.012$, Cohen's $d=.73$)。Basic Test 01において，平均値が4.4から5.2に伸び，1%水準で統計的に有意だった ($t(25)=3.47, p=.002$, Cohen's $d=.98$)。また，テストの種類（発問）の異なりはあるが，5月のTest 02はM=4.6，1月のTest 03ではM=5.0であったことから，Basicレベルのテストでは顕著な伸びが観察された。一方，AdvancedレベルのテストではTest 01では

表1 5月スピーキングテスト結果

	Q1		Q2		Q3		Q4		Q5		合計		レベル	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
Basic Test 01	4.2	0.7	4.0	0.9	3.8	0.8	3.4	0.7	7.0	1.2	22.4	3.2	4.4	0.7
Basic Test 02	4.5	0.6	4.0	0.9	3.9	0.8	3.8	0.6	7.3	1.6	23.5	3.6	4.6	0.7
Advanced Test 01	3.9	0.9	3.4	1.2	4.1	1.0	3.7	0.7	7.0	1.4	22.0	3.4	6.1	0.7
Advanced Test 02	4.5	0.7	3.7	0.9	3.8	1.0	3.5	0.8	6.6	1.2	22.0	2.9	6.0	0.6
全体の平均	4.3	0.8	3.8	1.0	3.9	0.9	3.6	0.7	7.0	1.4	22.5	3.3	5.3	1.0

表2 1月スピーキングテスト結果

1月 平均値	Q1		Q2		Q3		Q4		Q5		合計		レベル	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
Basic Test 01	4.6	0.6	4.6	0.6	4.5	0.6	4.2	0.8	8.2	1.5	26.1	3.0	5.2**	0.7
Basic Test 03	4.8	0.5	4.4	0.6	4.3	0.7	4.0	0.6	7.8	1.3	25.4	2.8	5.0	0.7
Advanced Test 01	3.9	1.0	3.4	1.0	4.0	0.9	3.7	0.8	7.3	1.6	22.2	3.7	6.1	0.8
Advanced Test 03	4.7	0.6	3.8	1.0	4.0	0.9	4.0	0.5	7.9	0.9	24.3	2.6	6.4	0.6
全体の平均	4.5	0.7	4.1	0.9	4.2	0.8	4.0	0.7	7.8	1.4	24.6	3.4	5.6	0.9

* $p<.05$; ** $p<.01$

M=6.1で変化がなかった。また、5月のTest 02でもほぼ同レベルのM=6.0であったが、1月のTest 03ではM=6.4とやや高いレベルの評定であった。

異文化理解の指標

年度初期と終期に行った質問紙、「国際語としての英語」認知評価スケールの結果を表3に示す。4つの因子における全体平均値の推移に有意な差は見られなかった。質問項目別に見ると、「EIL 2:多様な英語に対する態度」の「4 今日、インド英語、香港英語、シンガポール英語などのさまざまな種類の英語が、人々に受け入れられるべきだ。」と「6 今日、インド語訛りの英語、中国語訛りの英語、日本語訛りの英語など、さまざまな種類の英語が、人々に受け入れられるべきだ。」において5%水準で有意な変化が見られた。

また、「EIL 3:多言語/多文化間コミュニケーションのための方略」の「9 私は自分の国の文化や習慣を、英語で明確に説明できる。」において2年生に5%水準の有意な変化が見られた。

学年別にみると、演習初年次の2年生における「EIL 4:英語話者のアイデンティティのとらえ方」の全体平均において5月M=2.7から1月M=3.1へと5%水準の有意な変化が見られた。

具体的には「12 英語教師は、私に「ネイティブ」のように話すことを強要すべきではない。」「13 私はたとえ自分の英がなまっていて笑われても気にしない。」「14 自分の英語が理解される限り、アメリカ人やイギリス人のような(標準的な英語を)話す必要はないと考えている。」の3項目すべてにおいて5%レベルの有意な変化が見られた。

面接におけるオンライン英会話に関する発言

面接の発言を掘り起こした後、要点をまとめて分析し、4つの内容に分類した。スピーキング不安と解消(表4)、異文化理解と英語観の相対化(表5)、言語学習(表6)、課題意識(表7)、それぞれに前期10回終了時

点の7月と秋学期終了時点の1月における言説のまとめを示す。

表3 「国際語としての英語」の認知評価結果

質問項目	全体		3年		2年	
	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post
1 今日、英語は世界中の人々と効果的にコミュニケーションをとるための国際言語として使用されている。	4.7	4.7	4.9	4.9	4.5	4.5
2 現在、非英語圏の国の多くが、公用語や国際言語として英語を使っている。	4.2	4.3	4.1	4.4	4.3	4.3
3 今日、英語は世界中のビジネス、文化活動、教育活動に使われている言語である。	4.5	4.6	4.8	4.6	4.3	4.5
EIL 1: 現在の英語の位置付けの理解	4.5	4.5	4.6	4.6	4.3	4.4
4 今日、インド英語、香港英語、シンガポール英語などのさまざまな種類の英語が、人々に受け入れられるべきだ。	4.1	4.5*	4.0	4.7	4.3	4.3
5 英語教師は、いろいろな訛りのある人々から録音されたリスニング教材を使用してよい。	3.5	3.5	3.3	3.2	3.7	3.8
6 今日、インド語訛りの英語、中国語訛りの英語、日本語訛りの英語など、さまざまな種類の英語が、人々に受け入れられるべきだ。	4.1	4.4*	4.1	4.6*	4.0	4.3*
7 教師は、リスニング教材としてネイティブ以外の人同士の英語による対話（例えばインドネシア人と日本人）を含めてよい。	3.3	3.4	3.4	3.3	3.3	3.6
EIL 2: 多様な英語に対する態度	3.8	4.0	3.7	3.9	3.8	4.0
8 私は異なる文化の背景を持つ人と話すとき、その人の背景に応じて対話のし方を調整できる（日本語の場合、英語の場合問わず）	3.3	3.1	3.5	3.4	3.1	2.8
9 私は自分の国の文化や習慣を、英語で明確に説明できる。	2.4	3.0*	3.0	3.1	1.8	2.8*
10 私は自分の国の人が話す英語とは異なる英語の話し方や発音に対して、寛容に受け入れることができる。	3.7	4.0	3.6	4.4	3.8	3.6
11 私は英語が母語ではない人の英語に対して、適切に対応できる。	3.1	3.2	3.3	3.4	2.8	3.0
EIL 3: 多言語/多文化間コミュニケーションのための方略	3.1	3.3	3.3	3.6	2.9	3.1
12 英語教師は、私に「ネイティブ」のように話すことを強要すべきではない。	2.8	3.0	3.1	3.1	2.5	2.9*
13 私はたとえ自分の英がなまっていて笑われても気にしない。	2.6	2.8	2.6	2.8	2.5	2.8*
14 自分の英語が理解される限り、アメリカ人やイギリス人のような（標準的な英語を）話す必要はないと考えている。	2.7	3.1	2.6	2.7	2.9	3.5*
EIL 4: 英語話者のアイデンティティのとらえ方	2.8	3.1	2.9	3.0	2.7	3.1*

表4 スピーキング不安と解消 () 内は発言者無作為ID

7月	楽しい (A) ; とにかく喋れないといけない (A) ; いつでも話したければ話せるのがいい (C) ; 話す抵抗感が減った。伝えようという力がついた (D) ; 最初は25分もたなかったが最近追加情報を交えて話している (F) ; お気に入り登録している先生がいる (I) ; よく間違えうけど平気になった, 質問ができるようになった (Q) ; 英語でいえることが増えた。前より喋れるようになったかも (R)
1月	質問ばかりされていたが, 最近は切り返せる (A) ; 考えて言葉を出せるようになった (K) ; あんまり用意せずに話せている (M)

表5 異文化理解と英語観の相対化

7月	カメルーンの先生がお気に入りです。フリートークは先生によりますが, 毎回の先生です (C) ; いろんな国の人と話せた。フィリピン, セルビア, ナイジェリアとか (G) ; いろいろな英語に違和感あまり感じない (G) ; フィリピン, マケドニア, いろんな国の人と話した。ネイティブスピーカーへのこだわりはない (H) ; フィリピン, セルビア, アフリカ系の人と話せて楽しい, 新しい発見があります (K) ; フィリピン, セルビアの人多い, 話を大事してくれる人が良い (L) ; セルビア, フィリピン, ボスニア, ナイジェリア, いろんな英語が聞けた。フィリピン英語が聞き取りやすい (M) ; フィリピンの人が主です。ナイジェリアの人は発音が聞き取りづらい, あまり意見を言ってくれない。セルビア人はロシア語みたい。国別のイントネーションもないのに興味がある (N) ; フィリピンやヨーロッパの先生が多い (P) ; フィリピン人, セルビア人の発音がすごい (良い意味で) (R)
1月	発見があります。教育の話とかでモジュールとか (E) ; フィリピン系, セルビア系の人とBLMの話とか盛り上がった (G) ; 女性専用列車の話とかナイジェリアの先生は反対だった (I) ; アフリカの話は面白かった, 政治の話, 軍事政権の話。フィリピンの先生が女性車輻に感動してた (L) ; その国の現状が聞ける。Bike Shareでセルビアとの違いとか, いったことのない国の人の価値観が発見できる (N) ; 9割ぐらいセルビアの先生でやっている (O) ; 授業でやったVeganは個人の意見が聞けた。GoToは日本特有と分かった。Lockdownが厳しい国があることも (P) ; こちらの話題をふると, 捕鯨とかV E G A Nから食生活, 発見がある。国の特徴とか (R)。

表6 言語学習

7月	毎日やってます (D) ; 6月は週5でやった (I) ; 5,6月は毎日やりました (L) ; 絶対毎日やると決めてやった (O) ; 毎日やると決めている (P) ; 英語をもっと直してほしい (K) ; トピックの説明が手間取るのであらかじめ題材を送って置いて, プレゼンテーションの概要を話します (J) ; タイピングで指摘してくれるのは良い。こちらからわからない単語などは聞き返して説明してもらおう (L) ; 知らない単語をとにかく声に出しておくようにしてます (O)。
1月	やらない日がない (B) ; Daily Newsでやってる (C) ; 普段喋らない内容を喋るので表現が増える, 関連する語は予習するようにしている (F) ; Go Toについてとか日本の話題なの質問の準備で苦労した (H) ; どうか話すうちにリスニング力が上がった気がする (I) ; 間違いをチェックされるのがいい。セルビアの先生, 話題を説明しつつ単語buildingをarchitectureに直された (J)

表7 課題意識

7月	こちらから質問するので、追加の質問を考える時間を速くするようにしてます (C) ; こちらから質問することを大事にします (E) ; 話す上で一番足りないのは単語です (O)
1月	伸びている気がしない。DMMをやることに満足してしまっている (D) ; 自分が主導権握るのは難しい、質問1つに10ぐらい返ってくる (L) ; わかりやすく話してくれる人がいい。先生による (P) ; 先生によっては質問ができない。こちらが質問することに慣れていない (Q) ; 内容が難しくなってくるとつなげるのが大変 (R) ; 質問を投げた後の会話ができない (S)

8. 考察

スピーキングテストの結果はテスト項目の差や個人差を伴いつつもおおむね向上を示した。今回は詳述しないが、評価者間の差、テストレベル間の差、テスト項目やテスト番号による差など多くの揺らぎを抱えたうえでの数値処理であることを考慮しても、初期の評定レベルの幅が4.4~6.0、終期が5.0~6.4であったことから、全体としては話す力が向上に向かっていると言えよう。

「国際語としての英語」認知評価スケールの結果から、異文化に対する肯定的な態度変容として、多様な英語が受け入れられるべきとのとらえ方、自国文化を英語で紹介することに対する自信、自分の英語に自信を持つこと、ネイティブスピーカーのみをモデルとしない学習態度などにおいて、顕著な変化が観察された。演習の一連の活動の中で日本人同士で英語を使う経験を積んだり、オンライン英会話を通じて多様な英語に触れることで、国際共通語としての英語の視点が養われたと言えよう。

面接データからも、オンライン英会話を通して、毎日のように英語を話したり、自らが主導権をもって発問する活動を行うことによって、スピーキング不安の解消はもとより、考えながら話せる、即興で話せるといった、自信や余裕が感じられる言説へと変化した(表4, 1月)。その過程には異文化理解と英語観の相対化があると思われる。多様な英語にまずは慣れ親しんだり楽しみを感じたりしながら英語の多様性を認める形で英語観を徐々に相対化させながら(表5, 7月)、授業で扱った話題を中心にした深

みのある異文化事情の情報交換が行われたと推察できる（表5, 1月）。また、異文化理解に関する発言の多くが、上述の「国際語としての英語」認知評価の結果を裏打ちする内容となっている。

言語学習に関しても、毎日やるという姿勢の顕示が多い傾向（表6, 7月）から、学び方のこつや進歩の実感、修正フィードバックへの欲求などより精緻化した、体感的な学び方を実感しているものと思われる（表6, 1月）。このことは、次の項目である課題意識に関する発言の多さにも表れている（表7）。具体的には、慣れからくる進歩の実感の不足、対話における主導権維持の難しさ、対話パートナーである「先生」の理想像などが言及された（表7, 1月）。面接データ全体から、多様な人々と英語を通して接することによる内容中心の異文化理解の深化がうかがわれる。この点こそが、学習者が内容的なハンディを背負わずに対等に話すことができる通常授業の内容を活用したオンライン英会話の利点と思われる（Zwaard & Bannink, 2018）。

9. 結論

演習において国際的・社会的な話題を扱った発信型形式の授業の延長線上に、オンライン英会話を利用した多様な英語話者に発問する課題に組み込むことによって、スピーキング力の向上、国際語としての多様な英語に対する寛容な態度、異文化理解の促進、英語学習方法の精緻化の可能性が明らかになった。

オンライン英会話が提供する資源は実は限られている。講師は本来の意味での教師としての資格を持つ者は少なく、英語が流暢な対話パートナーとしての位置づけが強い。また、オンラインとはいえ1対1の対面という心理的な圧迫の強い状況で自らの意見を自由に語ることは、初級・中級レベルの日本人英語学習者にとっては容易なことではない。小学校から大学まで、どの学齢の英語教育においても、1対1の状況に慣れさせるような

タスクの練習やコミュニケーションを促進させるための具体的な補助が必要である。

オンライン英会話サイトは今後も個人または学校単位で更に活用が進む可能性がある。しかし、いつも自己紹介と会話講師が持ち込む話題ばかりのコミュニケーションではなく、年齢にあった話題（題材）により、ある程度精緻な対話を対等の関係で行えるような事前指導や事前学習があって然るべきである。オンライン会話で英語を使った深みのある異文化理解を進めてこそ英語学習の本来の楽しみが増すものと思われる。

本研究の課題として、実験的手法を採用していないため、スピーキング能力などの得られた効果の起源が必ずしもオンライン英会話のみに起因しない可能性がある。また、インタビューデータの分析においても、クラスター分析などの精緻な手法を用いていないので、解釈には注意が必要である。

今後の研究課題としては、ダイナミックアセスメントの手法により、個々の学習者のオンライン英会話の中でスピーキング音声、学習者がとったノート、インタビューでの発言などを関係づけながら分析し、オンライン英会話の効果をより客観的に精査することである。

付記

本研究は、日本学術振興会による科学研究費助成金事業、基盤研究（C）「コンピュータによる高変動音声訓練HVPTとシャドーイングが英語の調音に及ぼす影響」（研究課題番号：20K00785、研究代表者：飯野 厚）による研究成果の一部である。

参照文献

- 飯野 厚, 藤井 彰子, 籾田 由己子, 佐藤・ヘザー・ジョンソン, 中村 洋一, 岡 秀夫 (2020)「オンライン対話を取り入れた発信型の指導が英語スピーキング能力に与える影響」法政大学多摩論集第36巻, 95-113.
- 江口真理子 (2019)「オンライン英会話はスピーキング能力と相関するか」『総合政策論叢』(島根県立大学総合政策学会) 第38号, 41-51. 小林 翔 (2021)「オンライン英会話学習によるスピーキング不安と意識の変容」茨城大学教育実践研究39, 89-102.
- 瀧野みゆき (2019)「英語の授業に導入したオンライン英会話の評価・課題・可能性—英語コミュニケーションのアクティブラーニングの試み—」立教女学院短期大学紀要第 50号, 1-21.
- 遠山 道子・森 一将・新谷 真由 (2017)「オンライン英会話グループ学習を用いたスピーキング技能と心理的要因の改善—英語リメディアル教育への適用に向けて—」外国語教育メディア学会関東支部研究紀要第 1 巻, 37-59.
- 服部しのぶ (2021)「オンライン英会話を利用した実践的な医療英語運用力養成の試み」医療秘書実務論集 (藤田医科大学) 11, 27-34.
- 三田 薫 (2014)「スカイプ®英会話を活用した短期大学英語授業の試み—フィリピン人講師との1対1のオンライン英会話レッスンを授業に組み込むことによる効果—」実践女子短期大学紀要第35号, 19-43.
- 矢野経済研究所 (2021)「2021語学ビジネス徹底調査レポート (概要版)」(PDFファイル).
- Jenkins, J. (2006). Current Perspectives on Teaching World Englishes and English as a Lingua Franca. *TESOL Quarterly*, 40(1), 157-181.
- Nakamura, Y., Lee, J. S. J., & Lee, K. (2018). English as an international language perception scale: Development, validation, and application. *Language, Culture and Communication*, 50, 189-208.
- van der Zwaard, R., & Bannink, E. (2018). Reversal of Participation Roles in NS-NNS Synchronous Telecollaboration. *CALICO Journal*, 35(2), 162-181.

Effects of Incorporating Online English Conversation into an Active Learning Cycle on Speech Improvement and Cross-cultural Understanding

Atsushi IINO

《Abstract》

Practical use of a commercial online English conversation site in university EFL (English as a foreign language) instruction in Japan is shown in this paper. Interviewing a non-native English speaker/instructor through the site regularly throughout a year played a crucial role in reinforcing active learning seminar work with its focus on global and social issues. The effects of the use of the site were examined through pre- and post-speaking tests, a questionnaire on the attitudes toward EIL (English as an International language) (Nakamura, Lee and Lee, 2018) and semi-structured individual interviews. The results indicated that speaking skills improved to some extent and tolerant attitudes toward variations of English were observed. Abundant opportunities for cross-cultural communication with EIL may have nurtured such positive effects.

付録 1

ゼミにおけるオンライン英会話活用の経緯

2011年	One's Word社, 日本文化を紹介するスライドを準備し発表。1人10分程度で、全員が順番にプレゼンテーションを行いその後、フィリピン人講師と質疑応答
2012年	One's Word, S3 x T1 授業内50分, 教科書的话题で討論→講師の指導力差
2013年	フィリピン人講師2名と個人契約 (50分1,000円[1名500円]) S3 x T1 教科書的话题, サブゼミ化 (授業外50分@ゼミ室) →関与度の差
2014年	S2 x T1, 教科書的话题でTのQディスカッション→沈黙多い
2015年	S2 x T1 で3人のロールプレイ開始, 授業内で練習 (科研費事業)
2016年	S2 x T1 で3人のロールプレイ, DMM英会話の支援開始
2017年	DMM英会話の指定教師 3名。S2 x T1 □ロールになり切れず
2018年	DMM英会話法人契約, 1x1で週5日可能, ロールプレイ週2義務付け
2019年	フィリピン人2名と契約, S2 x T1に戻る
2020年~21年	DMM英会話法人契約, 学生1名vs先生1 (今回の報告) *使用料: 履修前に負担承諾取得

S:学習者, T:教師 (英語講師)

付録 2

教材コンテンツ (例 秋学期) 採用教材「Pros and Cons」(Cengage) に基づく

Weeks	Online Dates	Topics	Presentation Roster	
Week 1	Oct 11, 12, 13, 14	Unit 9 Grade Skipping: allow it or not? Should exceptionally good students be allowed to skip grades?	Oct 10	Pair 1 2 3
Week 2	Oct 18, 19, 20, 21	Unit 10 Performance or Seniority? Should the performance-based pay system be introduced into companies?	Oct 17	Pair 4 5 6
Week 3	Oct 25, 26, 27, 28	Unit 11 Free Trade or Protection: Is it beneficial to participate in Trans Pacific Partnership (TPP)?	Oct 24	Pair 7 8 9
Week 4	Nov 1, 2, 3, 4	Unit 12 Animal Rights or Human Profits? Should animal testing be maintained?	Oct 31	Pair 10 11, 12
Week 5	Nov 15, 16, 17, 18	Unit 13 Peace Constitution or Revision? Should Article 9 of the Japanese Constitution be revised?	Nov 14	Pair 1 2 3
Week 6	Nov 22, 23, 24, 25	Unit 14 Death Penalty or Human Rights? Should capital punishment be abolished?	Nov 21	Pair 4 5 6
Week 7	Nov 29, 30, Dec 1, 2	Original 1: Reject or accept? Should Japan accept more immigrants?	Nov 28	Pair 7 8 9
Week 8	Dec 6, 7, 8, 9	Original 2: Which is better to watch foreign language dramas and movies, subtitles or dubbing?	Dec 5	Pair 10, 11, 12
Week 9	Dec 13, 14, 15, 16	Original 3: Which is ecofriendly, paper or plastic? Should we totally ban using plastics cups/bags/cutleries?	Dec 12	Pair 1 2 3

付録4

オンライン英会話講師へのインタビュー記録例 (例, Animal Testingの是非)

DMM Review sheet 振り返りシート 対話中/対話直後のノート	
What linguistic features did I learn through Task A and B 対話中に英語のことで気づいた・指摘されたこと	
気づいたこと・先生から指摘されたこと (指摘モードオンで予約)	
語句、表現 Vocab & Expression	the Animal Welfare Act.
文法 Grammar	
その他 Others: Logic, Pronunciation	Cruelty free (= no animal testing)

付録5

英会話講師からの言語的内容的フィードバックの記録例 (例, Animal Testing)

Task B: Find the differences 自分の質問をもとにして、外国との文化的な違いを見つけよう!	
Make THREE questions to find facts or opinions of conversation partner 先生の国の動物事情、動物実験に関する法律の有無、動物実験に関する世論について質問を用意して先生に尋ねよう。	
先生の名前 (Jov) 国 (アメリカ) 対話実施日時 (10月27日20時00分~)	
Q1	Does your country have any law to protect animals?
Answer:	Yes. There is the Animal Welfare Act.
Q2	What do people think about animal testing in your country?
Answer:	It depends on kinds of animals. Cruelty free products that means no animal testing products are becoming popular.
Q3	Do you agree with animal testing?
Answer:	No. Because we have a responsibility to protect animal rights.

質問は事前準備! 質問の答えと裏側はDMM当日にその場で記入